

出典：「独学を支援する教材設計入門 第2版」 教えることの奥深さと糸口を知るために
1997年 鈴木克明・井口巖・鷲尾幸雄著 東北学院大学教育工学研究室（P171より
引用 但し下線部は安倍）

要求されないことをやり続ける意志の力

「教師は教え方がいくら下手でもクビになることがない」という妙な現実があります。教師は一度免許を取って学校に入れば「一人前」の教師として扱われます（ようやく初任者研修制度ができましたが）。普通の会社のように、「上司」が仕事を監督して指図してくれるわけではありません。自分で自分に鞭を打って、プロの教師になるべく研鑽を重ねなければならない立場に置かれるのです。誰からも「やれ」と言われることもなく、努力するかしないかは全面的に自分の判断に任されることになるのです。仕事をさぼって、自分の授業を反省するかわりに生徒のせいにするような教師は、生徒から好かれることはないでしょうが、だからといって「クビ」になることはありません。「教師はとても大変な仕事だ」と思います。しかし、それは、「仕事の量が多い」という理由からではありません。仕事の量の多さは、もしかすると、24時間戦っているモーレツサラリーマンに比べれば、たいしたことはないのかも知れません。むしろ、教師の仕事が「大変な」理由は、「上司がいないこと」「努力しなくてもクビにならないこと」にあります。さらに、「教える」という立場には強いものがありますから、思い通りに進まない授業の原因を「教えてもらっている」側の能力不足ややる気のなさに求め、自分ではなにも工夫していないのにもかかわらず「もっと真面目にやれ」「将来それでは困るよ」と号令をかけるだけでなにか十分なことをした気になってしまおうとしても不思議はありません。プロとは、絶えざる努力で自己研鑽を重ねる存在であると言います。「教える」ことのプロであり続けることは、本当に大変なことですね。

「教える」の2つの意味

日本に授業設計という考え方を広めた沼野一男は、「教える」という言葉には2つの使われ方があり、そのどちらの立場に立つかによって、学びを支援する態度が決定的に異なることを筆者に教えてくれました。「教える」の2つのとらえ方は、「意図的教育観」と「成功的教育観」と呼ばれています。意図的教育観では、自分は教えようとして努力していることを重視します。

教える意図があることをもって、教えると考えます。一方の成功的教育観では、教える行為が成功したかどうかを重視します。教える行為が成功するとは、教えられている側が、何かをそこから学んでいることを意味します。つまり、学びを支援することができた、といえるかどうか判断の別れ目になります。「授業をもう少しマシなものにしよう」という努力は、「教師が教えるという意図を持っているかぎり、それで教えたことになる」という考え方でなく、「たとえ教師がどんなに一生懸命に教えようとする意図を持っていたとしても、実際に生徒が何らかのことを学ばなければ教師が教えたとは言えない」という成功的教育観に基づいて「教える」ということを考えている人達によって続けられてきていると沼野は指摘しています。一生懸命に努力して、教えようとする意図を持つことはもちろん大切なことです。しかし、それだけでは十分でないと考え、「生徒の学びを援助できたかどうか」「生徒の学習は成功したかどうか」が気になるのであれば、それは「成功的教育観」に基づくものだと言えます。「生徒の努力が足りない」と嘆く前に、「教え方を工夫してみる」ことを考える人は「成功的教育観」に基づいて「教える」ということをとらえています。たとえ一生懸命やっているつもりでも、説明する声が後ろまで聞こえないのでは「教えている」とはいえない、聞こえたとしても理解できないような説明でも「教えている」とはいえない、「教えようとしている」と実際に「教えている」は同じではない、などの意見に賛成する人は、成功的教育観に立っています。

一度「教える」ことを「成功的教育観」によってとらえ、授業の方法を工夫していこうと決意した場合、何が気になるでしょうか？それは、「自分の意図がどの程度成功したのか」という点でし

よう。その疑問に答えるためには、

「自分が生徒に一体何を学んで欲しいと願っているのか(目標)」を確認すること、

「学びが成功したかどうかを確かめる手段(評価)」を準備して反省材料を得ること、

さらに、「毎時間の授業の積み重ねがカリキュラム全体のねらいに貢献しているのかどうか(授業の役割)」を系統的に検討すること

が必要となるのです。これらのこと、すなわち成功的教育観にたつて「教える」ということを考えるための方法を、独学を支援する教材づくりで学んできたわけです。教師を目指す人が最初から「教え方などどうでもよい」と思っているとは考えられません。しかし、いわゆる学校現場の「どろくさい」「理想的でない」「きれいごとではすまない」、現実の中で教師を続けるうちに、「教え方などどうでもよい」とは思わなくても、「もっと他にやることがある」「教師に大切なのは教え方だけではない」と考えるようにならないとは限りません。教師になりたての頃に抱いていた「理想」を持ち続けることができなく、徐々にマンネリの授業になってしまっている人が現実にいるかどうかは、皆さんの経験から判断できるでしょう。

教師の仕事には、「これだけやれば全て終わった」と安心できるような「終わりがいい」のです。やりたいことを全てやるということも不可能ですから、いくら努力を重ねても、「やりたいことが十分にできない」というジレンマから逃れることは困難です。そんな状況に置かれてもなお授業を工夫する努力を怠らずにいようとする「成功的教育観」を持ち続けるのは、本当にたいへんなことなのでしょう。しかし、よい授業を求めての努力を持続する鍵は「成功的教育観」を捨てないことだと思います。独学を支援する教材づくりで扱った様々な教育方法を考えるための「枠組み」、とくに「学習目標のとらえ方」や「成功を確かめ、成功に導く手段としての評価」が、みなさんが教育の現実の荒波にぶつかったときに「成功的教育観」を維持するための力となることを願って止みません。